バイロンと朔太郎の詩の世界
－アポロ的浪漫とディオニュソス的浪漫－

Byron and Sakutaro
－Highlighting Parallels with the Apollonian and Dionysian Narrative－

キャンベル 久美子
CAMPBELL Kumiko

浪漫派詩人バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824),イギリスのみではなくヨーロッパ諸国に名を馳せたバイロンの詩と，同じく浪漫派詩人萩原朔太郎（1886-1942）の詩を取りあげる．朔太郎は『月に吠える』(1917）の序において，詩について語る.「詩本来の目的は寧ろそれらのものを通じて,人心の内部に顫動する所の感情そのものの本質を凝視し，かつ感情をさかんに流露させること」であり,「人間の言葉で説明することが出来ないものまでも説明」し,「詩は言葉以上の言葉である」と[1]．かくある詩の世界を一つの基準に当てる．近世から近代に移行していく社会変動の時代，産業・社会の構造が激変するその激動の時代を生きる．一方に January 22nd 1824. Messolonghi. ‘On This Day I Complete My Thirty-Sixth Year.’[2] ギリシャ独立戦争支援途上の詩があり，他方に「日清戦争異聞（原田重吉の夢)」[3]（1935）の作品もある等々，背景として持つものの共通項も少なくない，イギリスの浪漫詩人バイロンと日本の浪漫詩人萩原朔太郎の詩の性格を比較検討することとする．

キーワード：バイロン，萩原朔太郎，アポロ的，ディオニュソス的，ニーチェ
Key Words ： Byron, Sakutaro Hagiwara, Apollonian, Dionysian, Nietzsche

１．はじめに

バイロンと朔太郎，同じロマンティシズムの詩人のなかでも性格の異なる両者を比較検討する．方法としては詩の性格をどのように見るかという観点から，美の原理のなかに文化と人間の特性を見い出したニーチェ（Friedrich Nietzsche,1844-1900)による美の類型を用いることとする．手掛かりとしての素材は二人の詩に登場する共通したモチーフにあたる「海」と「月」で，バイロンがこよなく愛した「海」と朔太郎の詠む「海」，朔太郎の詩のイメージのなかで印象的な「月」とバイロンの詠む「月」である．なお，比較研究等の先行研究については注釈 1）注釈 2）を参照されたい．

２．尺度としてのアポロ的，およびディオニュソス的

「アポロ的」,「ディオニュソス的」とは，ニーチェが『*Die Geburt Der Tragödie*（邦題：悲劇の誕生)』[4]（1872）の中で，美の範疇を類型づける対概念として提示したものである．この対比的な「アポロ的なもの」と「ディオニュソス的なもの」[5]とは本来，ギリシア神話の二柱の神，アポロとディオニュソスに由来する[注3]．ニーチェの解釈によれば，ディオニュソスとは，生の根源にうごめくほの暗いものの名称で，かつ酒と狂乱の神，衝動と情念の仮象，そして大地の神である．アポロとは，デルポイの神託を司る神であり，ギリシア的理性の代名詞，そして光溢れる形態の原理で，規則正しい秩序を体現し，また同時に日常の現実を超えて夢の中に浮かぶ美しい姿を生み出すものである．さらにニーチェはこのアポロとディオニュソスの相互補完的関係をギリシア悲劇の原型として解釈し，悲劇の当事者たちは生存の奥底にあるディオニュソス的狂乱を知っていたが故に，その苦悩のなかでアポロ的形象を夢見て，神々も人々も生を形成していくと考える．

この二つの概念は，ギリシア文化がもった世界的な意味を見る上でも抜きにできないもので,また何故ギリシアをヨーロッパ文化の原型と見るのかといったことに繋がっている.

３．バイロン の「海」

Childe Harold's Pilgrimage [注4) 6)] (1812-1818) 第Ⅳ巻，第 178-184 スタンザは，ローマ近郊の Alban Mount から海を望んだときの感慨を詠ったものといわれている．永遠性，無限の時に繋がる雄大なこの大海原賛歌には海についての調和のとれた綜合性が示され，ディオニュソス的浪漫としての陶酔とアポロ的浪漫としての夢とが折り重なって表現されている．その始め[注5)] と終わりの詩行を挙げる.

There is a pleasure in the pathless woods,
There is a rapture on the lonely shore,
There is society, where none intrudes,
By the deep Sea, and music in the roar:
I love not Man the less, but Nature more,
From these our interviews, in which I steal
From all I may be, or have been before,
To mingle with the Universe, and feel
What I can ne'er express, yet can not all conceal.
(*Childe Harold's Pilgrimage* Ⅳ,st.178)

路なき森には喜びがあり、
寂しい岸には歓喜があり、
誰も侵さぬ深い海には友があり、
波の轟には楽の音がある。
わたしは人を愛さぬではなく、
自然をさらに愛す。そして今や昔の
自分を忘れさせてくれるこの自然との交わりゆえに、
宇宙に融け込み、言い表せなくとも
隠しおおせぬものを感じるのだ。(訳 東中稜代 [7)])

このように海とバイロン，そして宇宙との関係が詠われ，さらに，次のようにも.

Thou glorious mirror, where the Almighty's form
Glasses itself in tempests; in all time
Calm or convuls'd - in breeze, or gale, or storm,
Icing the pole, or in the torrid clime
Dark-heaving; - boundless, endless, and sublime -
The image of Eternity - the throne
Of the Invisible; even from out thy slime
The monsters of the deep are made; each zone
Obeys thee; thou goest forth, dread, fathomless, alone (Ⅳ,st.183)

汝、栄えある鏡よ、全能なる者の姿を
嵐に映すものよ。いつのときも、
凪いでも荒れても、微風、強風、あるいは暴風の時も、
極を凍らせる時も、熱帯で黒く波打つ時も
汝は果てしのない、終わりのない、崇高なる者、
永遠の姿よ、見えざるものの王座よ。
汝の泥の中からは深淵の怪物さえ
創造される。おのおのの地帯が汝に従う。
汝は進む、威風堂々、底知れず、ただ独りで。

・・・・　・　・・・・・　・　・・

And I have loved thee, Ocean! and my joy
Of yourself sports was on the breast to be
Borne, like thy bubbles, onward: from a boy
I wanton'd with the breakers - they to me
Were a delight; and if the freshening sea
Made them a terror — 'twas a pleasing fear,
For I was as it were a child of thee,
And trusted to thy billows far and near,
And laid my hand upon thy mane - as I do here. (Ⅳ, st.184)

大海原よ！　わたしは汝を愛した。
青春の楽しい遊びは汝の胸の上で、
汝の泡のように運ばれることだった。
少年の頃からわたしは砕ける波と戯れた。
波はわたしには喜びだった。海が元気づき
波を恐ろしいものにしても、それは快い恐怖だった。
なぜならわたしは汝の子のように、
汝の大浪にどこまでも身を任せ、
汝の鬣に手をおいた—今もそうするように。

「大浪と戯れる st.184」ところのバイロンは海に抱かれ，大自然に包摂されてそこにある．他方，後述する朔太郎の方といえば，波の繰り返しに感情し，波そして海に距離を置いて立つのである．ロマン派詩人の詠うイメージは明らかに異なる．このイメージの異なりはおそらく海への対し方の違いでもあり，バイロン，朔太郎は共に生きることに含まれる苦悩を意識しながらも，その生き方，あるいは，その先にある「死」はそれぞれ異なった光を放つのであろう．

Childe Harold's Pilgrimage におけるバイロンの自然との融和を求める大洋の coda には，アポロンの理知の働きで困難を乗り越えていこうとする生産性が見いだされ，言い換えれば，バイロンの海はディオニュソスをアポロの世界が包摂していると捉えられるであろう．では，次に朔太郎の海への対し方をみてみよう．

４．朔太郎の「海」

朔太郎の「海」は結論からいえば，人間の生の真相が描きだされていると捉えられる．彼は第５詩集『氷島』(1934)公刊の後５年，抒情詩と散文詩とを集めた『宿命』(1939) を刊行している．この詩集に「海」[8] と題する散文詩がある．

海を越えて、人々は向うに「ある」ことを信じてゐる。島が、陸が、新世界が。しかしながら海は、一の廣茫とした眺めにすぎない。無限に、つかみどころがなく、単調で飽きつぽい景色を見る。

海の印象から、人々は早い疲労を感じてしまふ。浪が引き、また寄せてくる反復から、人生の退屈な日課を思ひ出す。そして日向の砂丘に寝ころびながら、海を見てゐる心の隅に、ある空漠たる、不満の苛だたしさを感じてくる。

海は、人生の疲労を反映する。希望や、空想や、旅情やが、浪を越えて行くのではなく、空間の無限における地平線の切断から、限りなく単調になり、想像の棲むべき山影を消してしまふ。海には空想のひだがなく、見渡す限り、平板で、白昼の太陽が及ぶ限り、その「現実」を照らしてゐる。海を見る心は空漠として味気がない。しかしながら物憂き悲哀が、ふだんの浪音のやうに迫つてくる。

海を越えて、人々は向うにあることを信じてゐる。島が、陸が、新世界が。けれども、ああ！もし海に来て見れば、海は我々の疲労を反映する。過去の長き厭はしき、無意味な生活の旅の疲れが、一時に漠然と現はれてくる。人人はげつそりとし、ものうくなり、空虚なさびしい心を感じて、磯草の枯れる砂山の上にくづれてしまふ。

人々は熱情から——戀や、旅情や、ローマンスから——しばしば海へあこがれてくる。い

かにひろびろとした、自由な明るい印象が、人々の眼をひろくすることぞ！　しかしながらただ一瞬。そして夕方の疲労から、にはかに老衰してかへつて行く。
　海の巨大な平面が、かく人の観念を正誤する。

そこにみる海の印象は,「すべての生命は、何の目的もなく意味もない、意志の衝動によつて盲目的に行為しているもの」とし，さらに彼自身で付した「散文詩自註」[9]において，次のように記している.

　海の憂鬱さは、無限に単調に繰返される波の波動の、目的性のない律動運動を見ることにある。おそらくそれは何億萬年の昔から、地球の却初と共に始まり、不断に休みなく繰返されて居るのであらう。そして他のあらゆる自然現象と共に、目的性のない週期運動を反覆している。それには始もなく終もなく、何の意味もなく目的もない。それからして我々は、不断に生れて不断に死に、何の意味もなく目的もなく、永久に新陳代謝をする有機体の生活を考へるのである。あらゆる地上の生物は、海の律動する浪と同じく、宇宙の法則する因果律によつて、盲目的な意志の衝動で動かされてる。

朔太郎の「海」とは命の根源としての海であり大地に根付いたものである．生の特徴である運動，繰り返されていくことの大本であるその海は生命体の根源を意味し，彼はそこに永遠の時間を見ている.「海の印象が、かくの如く我々に教へる」とするなかにあって，朔太郎は生きる目的を他に求めて目的を持ちたかったのだろうが，彼には，敢えて目標を立てて，それを実現するということができなかったのであろう．目的の持ち方自身の問題性を朔太郎は自分では自覚していなかったのか，バイロンなら乗り越えようとするであろうそれを，敢えてわがものにしようとはしなかった．不動の価値がディオニュソスの世界にはあるが，しかし根源から働く不動性をどこまで分かっていたか．彼においては分からないということがつまらない，つまりニヒルということに繋がっているのであろう.
かりにそうだとすれば，朔太郎にとって月は如何なる働きをするものであろうか，続けて彼の「月」を見ていこう.

５．朔太郎の「月」

朔太郎の最も重要とされる第１詩集『月に吠える』(1917）と，続く詩集『青猫』(1923）にある作品を中心に朔太郎の「月」を室生犀星選詩集[注6)] から見ることとする.

　悲しい月夜

ぬすつと犬めが、
くさつた波止場の月に吠えてゐる。
たましひが耳をすますと
陰気くさい声をして
黄ろい娘たちが合唱してゐる
合唱してゐる
波止場のくらい石垣で。
いつも
なぜおれはこれなんだ、
犬よ
青白いふしあはせの犬よ。
（詩集「月に吠える」）

「悲しい月夜」[10]には目的を持ちたがっている朔太郎にそれができず,無味乾燥の世界に,月に刺激された切ない情緒が動きを与える.
変化のないということはニヒルという世界に進む.「生活はただ無意味な憂鬱の連なり」であり「げにそこにはなにごとの希望」もない，月に吠えるのは人であり，そして朔太郎自身である.「吠える犬」という詩集『月に吠える』以前の作の中で,「吠えるところの犬

は　青白き月夜に於ての人である」と．[11)]「犬よ、」と呼びかけながら，朔太郎は憂鬱な自分の魂を見つめている．

月に刺激された切ない情緒に月は動きを与え，無限に続く無味乾燥の世界のなかで月に向かって吠える朔太郎の世界，無限という闇に通じるそのなかにあっての光としての月が遠くにある．それは孤独の先に仄かにかつ繊細な温もりをもつ月である．人を遠ざけながらに人を恋う朔太郎自身の自我を映すのであろう.彼の詩に底流するニヒルという世界で，ディオニュソス的な放縦熾烈な虚無主義（ニヒリズム）に落ち入ることから常に彼を引き上げ保護してくれるものがこの均斉のとれた世界にある「月」といえるのではなかろうか.

さらに朔太郎の月をみていけば，詩集『青猫』およびそれ以降では，「月夜」[12)]において，動きのない海にさざめきを与えてくれる月があり，また，「涅槃」[13)]と題する詩では，「あまりに憂鬱なる厭世思想の否定の絶望の悩みの樹蔭にただよふ静かな月影」を，「哀愁の雲間にうつる合歓の花」（第３詩集『蝶は夢む』[注7)]（1923））とも歌う．

月　夜

重たいおほきな翅をばたばたして
ああ　なんといふ弱弱しい心臓の所有者だ。
花瓦斯のやうな明るい月夜に
白くながれてゆく生物の群をみよ
そのしづかな方角をみよ
この生物のもつひとつのせつなる情緒をみよ
あかるい花瓦斯のやうな月夜に
ああ　なんといふ悲しげな　いぢらしい蝶類の騒擾だ。
（詩集「青猫」）

緑色の笛[注8)]

この黄昏の野原のなかを
耳のながい象たちがぞろりぞろりと歩いてゐる。
黄色い夕月が風にゆらいで
あちこちに帽子のやうな草つぱがひらひらする。
さびしいですか　お嬢さん！
ここに小さな笛があつて　その音色は澄んだ緑です。
やさしい歌口をお吹きなさい
とうめいなる空にふるへて
あなたの蜃気楼をよびよせなさい
思慕のはるかな海の方から
ひとつの幻像がしだいにちかづいてくるやうだ。
それはくびのない猫のやうで　墓場の草影にふらふらする
いつそこんな悲しい暮景の中で　私は死んでしまひたいのです。
お嬢さん！
（詩集「青猫」）

朔太郎は「小乗仏教的な寂滅為楽の厭世感（『定本青猫』自序）」[14)]の中にあったが，「緑色の笛」[15)]「思想は一つの意匠であろうか」[16)]に表れてくるものはともに，朔太郎が「黄色い月」とやりとりしているときの気持ちであり，また月が彼に与えてくれる気持ちであろう．詩に語らいがあり，後者の詩では，月と語るか佛と語るところの朔太郎がいる．月夜には佛の声を聞き，また月が語ってくるのであろう．永久の永遠に繋がる，しっかり大地に繋がっているディオニュソスの面が表出しているとえよう．

６．バイロンの「月」と，両者の「月」

ドイツ古典派詩人ゲーテ（J.W.Goethe,1749-1832）が称揚したとされる[注9)]バイロンが，

1816 年初秋のスイスで第 I 幕と第Ⅱ幕を，翌春ベニスで第Ⅲ幕を書いた劇詩 *Manfred* (1817)[17]における，劇詩第Ⅲ幕 4 場，塔の内部でマンフレッドがただひとり．折しも雪を頂く峰に月がのぼってくる場面.

The stars are forth, the moon above the tops
Of the snow-shining mountains.—Beautiful!
I linger yet with Nature, for the night
Hath been to me a more familiar face
Than that of man; and in her starry shade
Of dim and solitary loveliness,
I learn'd the language of another world.
I do remember me, that in my youth, …　(*Manfred*, Ⅲ. iv, 1-8)

星々がでた。月も、
雪に輝く峰々の上にのぼった。美しい。
今しばらく自然と共にいるとしよう。わたしには、
夜の面のほうが人間の面より親しみやすかったし、
星降る美しい夜の
闇の中で、ただ一人、別の世界の
言葉を覚えたこともあったからな。
思い出すなあ、若い頃だった、　(訳 笠原順路[18])

While Caesar's chambers, and the Augustan halls,
Grovel on earth in indistinct decay.—
And thus didst shine, thou rolling moon, upon
All this, and cast a wide and tender light,
Which soften'd down the hoar austerity
Of rugged desolation, and fill'd up,
As 'twere, anew, the gaps of centuries;
Leaving that beautiful which still was so,
And making that which was not, till the place
Became religion, and the heart ran o'er
With silent worship of the great of old! —
The dead, but sceptred sovereigns, who still rule
Our spirits from their urns.—　(Ⅲ, iv, 29-41)

カエサルの私室やアウグストゥスの大広間が
崩れ落ち、見分けもつかぬ体になっているのに。
お前、空を経巡る月よ、お前は、かつてこうしたもの全てを
照らし、優しい光を遍く投げかけていた。
月光は、これらの威厳に満ちた白銀の衣をかぶせ、
もっと平らならざる荒廃の痕を和らげ、幾世紀もの
亀裂をあたかも今建てられたかのように埋めていた。
美しいものは、美しきままに留め置き、
美しからざるものは、美しく変えたのが月光だった。やがて
この場所は、宗教となり、心からは、
古の偉人、死してなお王笏をふるう
帝王らへの静かな尊敬の念が
溢れ出たのだった。

バイロンの描く月は美しく，自然のなかに身をおき人間よりも親しみをもって語り合う月がそこにある．月は優しく，美しい命を与えてくれるものとしてあり，その月によって

慰められるという月の働きがある.バイロンにおいての月の姿とは永遠を表すところのディオニュソスの姿である.

バイロン，朔太郎の共通項として語りかけるものとしての月．朔太郎にあっては，どこまでも月の世界を見ていて，月が昼（太陽）にかわっていく循環の姿を見ず，月の世界にとどまり，ディオニュソス的な月を超えていくものが見えない．その語りかける月にある安らぎを見ているのが朔太郎の月だと捉えれば，対するバイロンのそれは，単に聖なる月だけでもなければ，静寂だけでもなく，月は変わりうる神秘を秘めたものとしての両面性が詠われている.

７.「ディオニュソス的」そして「アポロ的」

ニーチェの美の類型における対概念「アポロ的」と「ディオニュソス的」を尺度として，バイロンと朔太郎の詩の比較を試みた．両者の現れを再度描いてみると，同じロマンティシズムの詩人でも詩が象徴する世界が持つ詩の性格とスケールに異なりがある．バイロンのそれには,「海」で見てきたように，ディオニュソスのその永遠性を踏まえた時間のなかで作り上げていくという生成があり，ディオニュソスを包摂したアポロが詠われる．そこにはこの世の困難を超えて何かを創ろうとする生産性が存在する．一方，朔太郎のそれには目的，目標をもちえないということを実存として引き受けようとする姿がある．このような「海」における相違に対して，バイロンと朔太郎の二者における「月」においては，共通して月へ向かっての語らいがあり，また両者共に，月は働きをもつという点において大きな異なりはない．しかし詳細に捉え直せば，朔太郎にはどこまでも東洋的な静といえるもの，もしくは東洋的諦観というものがみえ[注 10)]，かりに夜なら夜，月なら月の世界にとどまる．他方，バイロンの月はあくまでも，宇宙，天体の大自然のなかにあるものであり，朔太郎のように温かさをもって人間を見守る月でもなければ，心理的空間的距離も異なる月として捉えられているといえるのではなかろうか.

なお，*Don Juan*,(1819-24),『ドン・ジュアン』[19)] のなかの機智の「月」[20)]，およびドイツ古典派詩人ゲーテの「海」(‘Meeres Stille’D216)[21)]への言及は次の機会に譲り，ここでは彼の作品のみを挙げる.

Tiefe Stille herrscht im Wasser,
Ohne Regung ruht das Meer,
Und bekümmert sieht der Schiffer
Glatte Fläche ringsumher
Keine Luft von keiner Seite!
Todessille Fürchterlich!
In der ungeheuren Weite
Roget Keine Welle sich.　　(‘Meeres Stille’ D216)

深き静けさ、水にあり、
なぎて動かず、わたつうみ。
あまりになげる海づらを
ながむる舟人の憂い顔。
風の来たらん方もなく、
死にもや絶えし静けさよ[注 11)]！
果てしも知らぬ海原に
立つ波もなし見る限り。　(訳 高橋健二[22)])

８．おわりにかえて

今回はニーチェの美の類型を手掛かりにバイロンおよび朔太郎の詩について比較検討した．バイロンに表れる「ディオニュソス的」および「アポロ的」という概念から見いだされるニーチェの，生の哲学『悲劇の誕生』に底流する生のダイナミズムは，一方でいう浪

漫主義的感受性の基礎にある美意識，美的範疇の「崇高」と深く関わる．また，自己の内的世界，時間的空間的無限を探る両詩人の世界に，詩人の感性そして生の実相と生への希求が表れる．詩そのものの形成的創造的過程を経験することの意味およびそこから与えられる洞察は深い．今後さらに検討を進めていきたい．

注釈

注 1）大森五郎は『萩原朔太郎とニーチェ:ディオニュソスの世界』[23]（1969）のなかに「朔太郎におけるディオニュソス的性格」に詳しく，朔太郎のそのディオニュソス性について論じている．「氷島」以降の朔太郎に，ニーチェのそれとは異なるが東洋的な意味におけるディオニュソス的肯定の境地が生まれたと認めてもよいのではないかと結論づけているところはディオニュソスとアポロの密接な関係を示唆し興味深い．

注 2）たとえば比較的新しいところから述べれば，東中稜代氏はバイロンと日本の文人との比較研究を行っている．国際バイロン協会 The Elma Dangerfield Award 受賞『多彩なる詩人バイロン』[24]第４章「バイロンと透谷と芭蕉」に収録の論文三編,Byron's *Manfred* and Kitamura Tokoku's *Horaikyoku*, Two Pilgrimages: Byron's and Basho's 他での対比のなかで，三者の比較を含め，西洋・東洋という括りとそれに納まらない人間の joie de vivre が論究されている．また，若い研究者の日本の明治期におけるバイロン受容を中心とした菊池有希などがあり，時代をさかのぼればバイロン熱とも表される明治期の北村透谷や、昭和期の阿部知二のバイロン研究に受け継がれるという大きな流れがあるが，筆者の取りあげた浪漫派詩人萩原朔太郎との比較という視点は新しい．

注 3）アポロおよびディオニュソスの表記について，ギリシア語およびギリシア神話ではアポローン[Ἀπόλλων],ラテン語ではアポロ[Apollō]，ディオニュソスはギリシア語[Διόνυσος]，ラテン語[Dionȳnsus]である．（出典：『ギリシア語辞典』古川晴風編著，大学書林（1988)，『Cassell's Latin-Dictionary』Macmillan，(1977)1979）

本稿では基本的にはニーチェの『悲劇の誕生』翻訳書に使用されている「アポロ」「ディオニュソス」を用いている．なお，研究社英和辞典（1967）では，アポロ，アポロン，ディオニソス，ディオニューソスという形で併記されている。時代と言語等により訳語の表記には少しの幅がある．

注 4）バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』第１・第２巻の出版は 1812 年，第３巻は 1816 年，第４巻は 1818 年，出版から「一朝目覚めて有名になったのを知った」とはバイロンの言とされている．同様に，朔太郎の第一詩集『月に吠える』もまた，読者からの強い反響を得て，当時の詩壇の代表的立場にある詩人たちから賞賛を集めている．「この詩集によって、正に時代の一つのエポックを作ったのである」と再販の序に記し自信の有り様を示しているが，両詩人のはじまりの勢いにも背景とする社会との呼応に類似性がある．

注 5）CHPⅣst178 では宇宙にとけ込んだ、永遠に繋がる時と生が詠われている．

注 6）萩原朔太郎と室生犀星，両者は，朔太郎の第一詩集『月に吠える』(1917）刊行の前年，犀星と雑誌『感情』を創刊（1919 年 11 月終刊．通刊 32 冊)，詩壇に新風を注いだとされる.[25] 朔太郎に最も近い詩人の選とする.テクストは原則として底本に従いましたが，旧字は新字に改めました．

注 7）第３詩集『蝶を夢む』は 1923 年に「現代詩人叢書」の第１巻として刊行され，『月に吠える』と『青猫』からの再録をそれぞれ８篇ずつ含む拾遺詩集である．

注 8）「緑色の笛」と題する詩作から月を引いたが，詩集『青猫』の序において「私の情緒は激情という範疇に属さない．むしろそれは霊魂ののすたるじあであり、かの春の夜に聴く横笛の響きである」といい，「その笛の音こそ、霊魂の実存にあこがれる羽ばたきである」と．

注 9）上杉文世『バイロン研究』[26] において言及されているように，エッカーマン（J.P.Eckermann）著による『その生涯の晩年における、ゲーテとの対話 Gesprache Mit

Goethe In Den Letzten Jahren Seines Lebens. Ⅱ』(1836) の翻訳『ゲーテとの対話 (中)』[27] に，1828-1832 年間からの年代順の区分の中に，バイロンに対する評価や関心についてのやりとりの記述や言及は少なくない．ヨーロッパ大陸まで及ぶバイロンの受容，影響の程度を知り得る手立てでもあろう．

注 10) 朔太郎の詩の世界を知る上で有用と思われる，涅槃「蝶は夢む」[28] より

花ざかりなる菩提樹の下
密林の影のふかいところで
かのひとの思惟にうかぶ
理性の　幻想の　情感の　いとも美しい神秘をおもふ。
涅槃は熱病の夜あけにしらむ
青白い月の光のやうだ。
憂鬱なる憂鬱なる
あまりに憂鬱なる厭世思想の
否定の　絶望の　悩みの樹蔭にただよふ静かな月影
哀傷の雲間にうつる合歓の花だ。

涅槃の熱帯の夜明けにひらく
巨大の美しい蓮華の花か
ふしぎな幻想のまらりや熱か
わたしは宗教の秘密におそれる
ああかの神秘なるひとつのいめえぢ―「美しき死」
　への誘惑。
涅槃は媚薬の夢にもよほす
ふしぎな淫欲の悶えのやうで
それらのなまめかしい救世の情緒は
春の夜に聴く笛のやうだ。

花ざかりなる菩提樹の下
密林の影のふかいところで
かのひとの思惟にうかぶ
理性の　幻想の　情感の　いとも美しい神秘をおもふ。

かのひととは釈迦をさす.憂鬱なる悩みとうつなる彼が静かに己をみれば,ここにゆく．永遠に眠る，悟りの世界，それ以上には変化しない．人間はみなそこに落ち着きなさいと，朔太郎は詠うのであろう．

注 11)「死にもや絶えし」は，(死のような) 伊木和子氏にならいたい．また，ニーチェによる海をひくと，朔太郎において「海」が生の象徴であるように，詩人ニーチェ晩年の『ディオニソス酔歌 Dionysus-Dithyramber』の「陽は沈む Die Sonne Sinkt」に，やはり生の象徴，ディオニュソスとしての海のイメージがある．

引用文献

1) 萩原朔太郎：『萩原朔太郎全集（第二巻)』，筑摩書房，pp.10-14（1976）
2) McGann, Jerome J.：*Lord Byron: The Major Works (Oxford World's Classics)*，Oxford University Press, pp.969-970（2008）
3) 萩原朔太郎：「日清戦争異聞（原田重吉の夢)」,『日清日露の戦争:攻（コレクション戦争と文学６)』，集英社，pp.15-21（2011）
4) ニーチェ，秋山英夫訳：『悲劇の誕生（岩波文庫 33-639-1)』，岩波書店（2010）
5) ニーチェ，秋山英夫訳：『悲劇の誕生（岩波文庫 33-639-1)』，岩波書店，pp.36-44（2010）
6) Byron, Lord: *The Poetical Works of Lord Byron*, William P. Nimmo, Edinburgh, pp.639-640（1870）
7) バイロン，東中稜代訳：『チャイルド・ハロルドの巡礼: 物語詩』，修学社，pp.284-287（1994）

8）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.228-229（1947）
9）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.266-267（1947）
10）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.186-187（1947）
11）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.184-185（1947）
12）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.151（1947）
13）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.170-172（1947）
14）萩原朔太郎：『萩原朔太郎全集（第二巻）』，筑摩書房，p.146（1976）
15）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.90-91（1947）
16）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.106-107（1947）
17）Byron, Lord：*The Poetical Works of Lord Byron*, William P. Nimmo, Edinburgh, pp.223-224（1870）
18）バイロン，笠原順路編：『対訳バイロン詩集（岩波文庫赤(32)-216-4 イギリス詩人選８）』，岩波書店，pp.169-173（2009）
19）McGann, Jerome J.：*Lord Byron: The Major Works (Oxford World's Classics)*, Oxford University Press, pp.373-879（2008）
20）McGann, Jerome J.：*Lord Byron: The Major Works (Oxford World's Classics)*, Oxford University Press, p.406（2008）
21）Johann Wolfgang von Goethe：*Werke*, 1(1), Cotta, p.66（1817）
22）ゲーテ，高橋健二訳：『ゲーテ詩集（新潮文庫，ケ-1-5）』，新潮社，pp.155-156（2010）
23）大森五郎：『萩原朔太郎とニーチェ』，東京文献センター，p.34，（1969）
24）東中稜代：『多彩なる詩人バイロン（龍谷叢書 19）』，近代文藝社，pp.283-331（2010）
25）萩原朔太郎，中村真一郎編・解説：『萩原朔太郎（近代の詩人 7）』，潮出版社，pp.96-97（1991）
26）上杉文世：『バイロン研究』，研究社，p.3（1978）
27）エッカーマン，山下肇訳：『ゲーテとの対話 中（岩波文庫赤(32)-409-2）』，岩波書店，pp.61-62　（2012）
28）萩原朔太郎，室生犀星選：『萩原朔太郎詩集』高桐書院，pp.170-172（1947）

参考文献

1）Graham, Peter W：*Lord Byron (Twayne's English Authors Series)*, Twayne Pub,（1998）
2）Lord Byron ： *Manfred*, Wilder Publications, LLC, pp.155-156（2010）
3）Rowley Rosemarie ： Byron's Constant Love- The Sea-From Sestos To Abydos
4）岩山三郎：『美の哲学：ニーチェによる芸術と人間の研究』，創元社，（1966）
5）門田守：「書評 Peter Cochran, Byron's Romantic Politics; The Problem of Metahistory」『会報』17, 日本バイロン協会，pp.31-37（2013）
6）拙稿：「口頭発表要旨　詩歌創造の炎（ほむら）：アポロ的ロマンとディオニソス的ロマン」，『会報』17，日本バイロン協会，pp.1-3（2013）
7）田原光広：「天体に描かれたバイロン的自画像：『マンフレッド』から『カイン』へ」，『欧米文化研究』18，pp.71-84（2011）
8）田吹長彦編：『チャイルド・ハロルドの巡礼：第三編　注解』，九州大学出版会（1993）
9）バイロン，キーツ，小川和夫[ほか]訳：『マンフレッド. レイミア ； イザベラ ； 聖女アグネス祭の前夜, その他の詩集（世界名詩集２）』，平凡社，pp.75-78（1968）
10）バイロン，小川和夫訳：『ドン・ジュアン（研究社選書）』，研究社（1955）
11）バイロン著，阿部知二訳：『バイロン詩集（新潮文庫ハ-2-1）』，新潮社（1951）
12）平井正穂『イギリス文学史 ： 人間像の展開（筑摩叢書，263）』，筑摩叢書，p.3（1980）
13）マルティン・ハイデッガー，薗田宗人，セバスティアン・ウンジン訳：『ニーチェ，芸術としての力への意志（ハイデッガー全集 43）』，創文社（1992）
14）三好達治選：『萩原朔太郎詩集（岩波文庫緑-62-1）』，岩波書店，（1981）